

# 1999年 卒業研究要旨

## 夫婦間分業の変化と子どもの性役割形成

石原 瑠美子 (7061-1007)

指導教官 : 笹原 恵

### 研究の背景

敗戦による法の改正により，戦後の日本社会は男女平等へ向けた動きが活発になってきた。そしてその結果「女らしさ」「男らしさ」という観念が変化してきている。社会体制の変化が人々の意識を変えたのだ。といっても変化は急に起こったわけではない。50余年という長い時をかけて，教育と世代の移り変わりによってゆっくりと変化してきたのである。それはなぜ，どのようにして，どんな場面で変化は起こってきたのだろうか。従来の「女らしさ」「男らしさ」は現代においてどれほど意味を持つのか。そういう疑問を抱いたことが今回の論文を書くきっかけとなった。

### 研究目的

戦後の社会体制の改革と，男女の役割意識の変化を各種のデータから把握する。さらに社会が変化するためには次の世代をつくる子どもの意識変化が重要であると考え，子どもの性役割意識はどうやって形成されるかということを探っていく。その上で性役割意識の変化の様相と現状を明らかにすることが目的である。

### 研究方法

『浜松市における家庭のしつけと性別役割分業についての調査』の実施

浜松市在住の夫婦 500 組計 1000 人対象

『大学生の性役割意識に関するアンケート』の実施

静岡大学の学生対象

この2つの調査結果を spss で集計し分析を行った。世代別，男女別による分析により，現代の夫婦間分業の実態，家庭教育に性役割のしつけがどの程度なされているか，現代のジェンダー意識の3点を明らかにする。

## 研究結果

### ①現代の夫婦間分業の実態について

夫は家事より育児のほうがやや協力度が高いものの、炊事、掃除、洗濯といった分野への参加度はきわめて低い。妻より夫のほうが多く担当している家事育児項目はなく、妻がほとんどを担当していることが現状である。

### ②家庭における性役割のしつけについて

現代の家庭内に男女の区別をしたしつけは存在する。子どもに男女の区別を期待するのは父親よりも母親のほうが多く、そしてそれに抵抗を感じるのは男性よりも女性のほうが多い。しかし「女（男）らしく」生きることよりも「その人らしく」生きingことを良いとする傾向が若い世代ほど見られるため、今後性役割のしつけは減少するであろう。

### ③性役割意識の実態

固定的性役割観、女性の就労、夫婦平等それぞれについて、男性よりも女性、年配よりも若い世代のほうが従来からの性役割観を持つことが少ない。従来からの性役割観で現在も残っているものは女性への家事育児労働の期待であり、これは社会制度がさらに整備されなければ変化が難しい観念である。

## まとめ

性別にとらわれない、男女平等な社会へ向けての意識が高まっている。しかし男性の意識は女性のそれより若干低いものとなっている。さらに意識は高まっても現状がそれについていけないという面が多くみられ、平等社会へ近づくためには更なる意識の改革と社会制度の改正という、個人と全体社会がともに働きかけていかなければならない問題がある。それでも固定的性役割観が減少し続けていることから、いずれ「性」ではなく「個人」によった生き方が自由にできる社会がやってくることを期待される。